日本中国語学会会報　2024年12月

https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/

◆目次◆

ご挨拶　　佐々木　勲人（日本中国語学会会長）……2
2024 年度全国大会総括……3
支部例会実施報告　2024.6 - 2024.12……5
会議報告……8
2024 年度支部例会および全国大会開催のお知らせ……15
支部例会から研究例会への移行について……15
事務局からのお知らせ……15

ご挨拶　　佐々木　勲人（日本中国語学会会長）

今年の全国大会は､11 月 2 日と 3 日の両日、250 名を超える参加者を得て関西外国語大学で開催されました。美しいキャンパスもさることながら、会場運営に携わる学生さんたちの行き届いたおもてなしが強く印象に残る大会となりました。初日の懇親会にも 120 名近い参加者があり、あらためてコロナ前の日常が戻ってきたことを実感しました。準備にあたられた吉田泰謙会員をはじめ、関西外国語大学の関係者のみなさまに心よりお礼申し上げます。

大会に合わせて開かれました理事会、評議会、総会では、すべての会議資料のペーパーレス化を実施いたしました。印刷にかかる経費と資源の節約になっただけでなく、事務局の作業負担も劇的に軽減されました。みなさまのご理解とご協力のおかげで、とくに大きな混乱もありませんでした。小さな一歩ではありますが、有益と思われる改革は今後も着実に進めていきたいと思っています。

改革といえば、今まさに取り組んでいる課題の一つに、会誌『中国語学』の活性化があります。投稿論文数の減少が続いている現状を何とか打破するために、吉川雅之前編集委員長を中心に検討が続けられてきました。その結果､「査読システムの可視化」と「二次審査期間の延長」という二つの改革案が示されました。具体的には、査読基準を明確にすることで、投稿者と査読者の双方にメリットがもたらされるよう､「査読指針」を制定して公表します。また、査読者のコメントを受けて投稿者が内容を修正する期間をこれまでより長く設定することで、1 か月程度の期間では修正が難しいと判断されて一次審査で不採用となっていた一部の論文を二次審査に掬い上げることが可能になります。現在、投稿規程や執筆要領など関連規則の最終調整を行っています。調整が完了し次第、来年度から実施してまいります。

コロナ禍を経て、私たちの研究環境も大きく様変わりしました。オンライン会議やリモート授業が一気に身近なものとなりました。こうした現状をふまえ、本学会の研究集会のあり方についても見直しを行いました。近年、各地の支部例会は参加者が減少し、地域によっては発表者を探すことも困難な状況が続いております。そこで、来年度より各地の支部例会を「研究例会」に改め、オンライン方式による地域を限定しない新しいスタイルで実施することになりました。全国大会や中国語学セミナーとの差別化を図りながら、これまで以上に魅力ある研究交流の場を提供してまいります。みなさまどうぞ奮ってご参加ください。

4 月にスタートした事務局ですが､新しいことを始めるには思った以上に時間と労力が必要なことを学びました。幸い、支えてくださる理事や委員のみなさんのおかげで、少しずつではありますが本学会を取り巻く諸問題の解決に取り組んでいます。運営に関してご意見やご要望がございましたら、どうぞ事務局までお知らせください。

引き続き、会員のみなさまのご支援をお願いいたします。

［2024 年 12 月 15 日記］

2024 年度全国大会総括

Ⅰ．今年度大会総括

第 74 回大会は、関西外国語大学（大阪府枚方市）を会場に、11 月 2 日（土)、3 日（日）に開催されました。

（1） 参加者数

参加者総数は 257 名（招待者 2 名、一般参加者 255 名)、うち非会員は 34 名でした。なお 1 日目のオンライン参加者は、21 名でした（開催校が確認できた人数)。また書籍展示は 19 社（賛助会員 13 社、非賛助会員 6 社）でした。

（2） 総評

今大会は昨年に続き、対面とオンライン（1 日目のみ) の両形式で開催しました。1 日目は、台風の影響で新幹線が大幅に遅延し、予定通りに到着できなかった会員が少なくありませんでした。2 日目は一転、晴れの特異日に違わぬ晴天となり、清潔で広々としたキャンパスも相まって、積極的な学術交流が行われました。

関西外国語大学の教職員・学生スタッフの皆様には大会までの長期にわたり、周到な準備を行っていただきました。とりわけ学生スタッフは、礼儀正しくかつ真摯な対応により、大会の円満な開催に大きな役割を果たされました。この場をお借りして、関西外国語大学のスタッフの皆様の献身的なご尽力に衷心より感謝申し上げます。

大会 1 日目は、北京大学・周韧教授「现代汉语语法注重组合式与黏合式的差别」と任鹰会員「“大语法”观念与汉语语法教学」の二つの特別講演が行われました。周教授は、“易位”“倒装”などと呼ばれる、いわゆる倒置現象について、先行研究の成果を詳細に検討のうえ、語句の構造との関係からその成立の可否を論じられました。「倒置現象」は、情報構造の観点からみれば、決して特殊な文とはいえず、「組み合わせ式積み木」型という文構造の考え方を提起されました。

任会員は、印欧語を軸とした理論的枠組みでは、中国語を十分に記述できないことを取り上げ、先行研究の成果をたどりつつ、沈家煊（2019，2020）等が提唱する「大語法」観の有用性を強調されました。また、教学の場においてもその点をふまえた工夫が必要であると述べられました。両講演共に、印欧語の理論的枠組みにとらわれず、中国語の真の姿をとらえる重要さを再認識させるものでした。

続いてのワークショップは、2 会場に分かれて行われました。砂岡和子会員企画の「大規模言語モデル時代の協同型フィードバック教学」では、まず杉江聡子、王怡人各会員とストックウェル・グレン教授（早稲田大学）による生成 AI を利用した授業実践報告がなされました。その後、砂岡会員、吉川龍生教授（慶應義塾大学）も加わり、LLMs 活用による語学教育の質的・量的変化と、対応する教学ガバナンスのあり方へと議論が進みました。会場・オンライン双方の参加者から様々な質問が寄せられ、AI 導入への期待と戸惑いが交錯している現状と、今後の効果検証や経験共有の必要性を共有しました。

小嶋美由紀会員企画の「コーパスを用いた数量的研究の可能性について―状態変化表現の研究を例に―」では、小嶋会員のほか、夏海燕、印雨琪各会員と松本曜教授（国立国語研究所）により報告が行われました。大規模

コーパス（BCC, 北京语言大学语料库）を用いた数量的研究の分析手法を紹介するとともに、調査結果からみえる中国語状態変化表現の特徴について、日本語や英語と比較した分析が示されました。フロアからは分析手法に関することから、個別言語の記述を類型論に落とし込む困難さまで多くの意見や質問が挙げられ、活発な交流がなされました。

大会 2 日目は、例年同様、分科会会場での口頭発表およびポスター発表が行われました。発表件数は、それぞれ 44 件、7 件でした。

このほか、今年度は新たに招待発表というセッションを設け、大西克也会員と木村英樹顧問に登壇いただきました。大西会員は、上古中国語における p-系と m-系の否定詞について機能の相違とその類型論的意義について論じられました。前者は、「実なる否定」を、後者は「虚なる否定」を表し、現代語における p-系・m-系と相反することが示されました。更に、この現象とクロフト（1991）の否定存在サイクル理論との関係や虚実の意味合いのとらえ方の変化など、類型論と個別言語研究の相互補完的研究の必要性について述べられました。

木村顧問は、中国語の疑問詞について、“代词”という文法範疇には収まらないことを指摘するとともに、各疑問詞が時間的安定性の軸上で名詞から動詞への各品詞に対応して位置づけられることを論じられました。疑問詞が要求する情報を指定的なものと記述的なものとに大別し、また対象とする意味範疇に各疑問詞を対応させていくことで、二つの“怎么”も含めた疑問詞全体の体系性が示されました。本セッションは初の試みでしたが、多くの会員が拝聴し、発表終了後も個別に質疑応答が続くなど、有意義なものであったことがうかがえました。

運営に関しては、今年度も事前参加申込制を採用しました。このことにより、新幹線の遅延により会場へ来られない方への対応として、急遽オンライン参加用の URL を配布することができました。こうした不測の事態への対応も可能となるため、今後とも事前申込にご協力をお願い致します。

託児所については、校内に設ける準備を進めていましたが、利用申請がありませんでした。託児所の設置は、大会参加に伴い生じる会員の負担軽減を目的とし、継続的な研究活動を学会としても支援するという意味合いがあります。来年度も開催校と協力しながら、託児所が設置できるよう計画していきますので、必要な方はぜひご利用ください。

（3） 今大会で見られた問題・課題

まず挙げられるのは、口頭発表時に資料を投影するモニター接続用アダプターの不適合でした。8 月末公表のプログラムにおいて注意喚起したほか、予稿集公開時にも、日本語および中国語による注意文書を掲載しています。会場では、開催校スタッフや司会者所有のアダプターを借用することにより、いずれも用意した発表資料を投影することができましたが、発表者向けの注意事項について、より一層の周知を図りたいと思います。

次に、当日の会場の問題として、ポスター発表会場内の移動がスムーズではなかった点が挙げられました。出入口近くの発表に多くの人が集まったことや安全上の配慮から会場中央のスペースを開放しなかったことが影響したと考えますが、今後は参加者の動線にも配慮したより適切な配置ができるよう工夫してまいります。

予稿集原稿については、一部期限内に提出

されないという異例の事態が起こりました。委員会に連絡がなかった 1 件については、発表者からの明確な説明がなく、委員会から理由書の提出を求めましたが、締め切り遵守の意識が希薄であると判断し、厳重な注意を促しました。原稿の書式については、概ね執筆要領に従っていましたが、一部変更を加えている、あるいはテンプレートを使用していない場合には再提出を求めたものがありました。予稿集は、電子版のみの発行となり、全て大会運営委員会委員により編集及び確認作業が行われます。円滑に作業が行われるよう、今後とも提出期限および書式の遵守をお願いいたします。

II.来年度の全国大会にむけて

来年度第 75 回大会は、2025 年 11 月 8 日・9 日（土・日）に東北大学川内キャンパス（代表：張佩茹会員）で開催されます。ワークショップ、および分科会研究発表・ポスター研究発表の応募期間等の重要事項については、決まり次第、学会ウェブサイトにてお知らせします。

開催準備及び大会運営に関しては、今年度の経験をふまえて改善を進めてまいりますが、引き続き会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

（大会運営委員会）

支部例会実施報告　2024.6 - 2024.12

◆関東支部例会

◇第 1 回：2024 年 7 月 27 日（土）午前 10 時～オンライン（Zoom）による開催

・張盛開（静岡大学）：平江影戏的语言研究

平江影戏是湖南省平江县的地方戏曲。本研究主要以实际演出的影戏剧目《后英雄》（时长 127 分钟）为对象，对其语言进行了研究。影戏的语言主要包括唱词和对白。唱词分为流传下来的不可更改的铁词和演出现场即兴创作的水词。对白则根据不同人物身份而有所不同，小兵、丫环等人物使用地道的平江方言口语，而书生、小姐等人则使用文言对白。两者之间的对白有文白相混现象。影戏的语言充分利用方言的魅力，尤其是“拉厉子”（类似小丑的角色）会巧妙利用同音谐音字制造幽默，其语言中还保留着很多古老的语言资料（如歇后语等）与特征。唱词的特征为两句一套，七字为基本，仄起平落。韵脚字基本上利用带鼻音韵尾的字，这与平江影戏的唱腔相关联。

・荒木典子（東京都立大学）:『満文金瓶梅』の漢文添え書きについて

『満文金瓶梅』（康熙 47 年序刊本）は謎の多い書物である。今回は所々に見られる、漢文添え書き（傍訳。主に、本来満洲語になかった語彙に付されている）がいつ、いかなる目的で書かれたかについて、訳語を手掛かりに考察する。本作品では、一部の漢語由来語彙の満文訳に複数のバリエーションが生じている。このままでは読者の混乱を招きかねないが、添え書きでマーキングすることで同一の語句を指していることがわかりやすくなる。添え書きの中には底本をよく見て書いたとは思えない誤字が見られることから、翻訳作業中に付されたものではないと考えられる。以上より、訳稿完成後、必要を感じた人物により添え書きが付された可能性を提案する。

◆東海支部例会

◇第 1 回：2024 年 9 月 28 日（土）午後 1 時～オンライン（Zoom）による開催

・譚哲（名古屋大学・院）：頻度を表す “容易”と“爱”の用法について

本発表では頻度の高さを表す “容易”と“爱”の比較を通し、“容易”の成立条件や意味特徴について論じるとともに、同様に「（し）やすい」の意味で用いられる “爱”の用法と特徴についても考察する。また、“容易”と“爱”の常にマイナスのニュアンスを伴いやすい理由を検討し、両方の区別を明確にする。“爱”は通常、動作主・物事自身が持っている性質や特徴（恒常的なもの）しか表せず、“容易”はある条件で発生しやすい事象（臨時的）を表すことができる。

・何静（名古屋大学・院）:「注視点」からみる中国語の静態存在文―“了”“着”の互換を中心に―

本報告では、①“桌上放了（着）一台电脑”、②“青藏高原一带才有了（*着）胡桃树”、③“新丝绸之路经济带，东边牵着（*了）亚太经济圈”のような静態存在文における“了”“着”の互換可否について注視点の観点から考察し、“了”静態存在文と“着”静態存在文の統語的・意味的特徴を明らかにする。結果から先に述べると、文中に注視点となる体詞項が存在する場合は“了”静態存在文が選択され、文中に注視点となる体詞項が存在しない場合は“着”静態存在文が選択されることを指摘する。

・許賢科（名古屋大学・院）：“多/少/早/晚+V+Num”の階層構造と有界性

“多、少、早、晚”が状語として用いられた際に、往々にして動詞の後に数量詞を伴うことがこれまで多くの先行研究で指摘されてきた。一方で、数量詞が生起する理由にまで言及する論究は少ないだけではなく、あったとしても、着目する角度がそれぞれ異なる。本発表では、まず IC 分析の手法を用いて形式全体の階層構造を明らかにする。すなわち、“[A][VO]”（状中構造）と区分するか（A は“多、少、早、晚”）、それとも“[AV][O]”（動目構造）と区分するかという問題を俎上にのせる。その上、数量詞との共起を要請する統語的条件を手がかりに、動作と性状の間に存在する整合性の有無という視点から、数量詞が用いられる動機づけの解明を試みる。

・勝川裕子（名古屋大学）：中国語における〈基点〉の認知―“离”と「カラ・マデ」の対応を中心に―

中国語の“离”は、2 点間の距離を計る〈基点〉を目的語にとり、空間的・時間的隔たりを表す介詞であるが、初級テキストでは、空間的隔たりには「カラ」が、時間的隔たりには「マデ」が対応すると説明されている。しかし実際には、“这儿很方便，离车站只有五十米左右。”［ここは便利だ、駅までたったの 50 メートルしかない。］や“离上次回故乡已经整整十年了。”［前回帰省してからまる 10 年になる。］のように、いずれの隔たりにおいても「カラ・マデ」が対応し得る。本発表では、空間的・時間的隔たりを表現する際、中国語話者がどのように隔たりを捉え、〈基点〉を設定するのか、また、それが日本語の「カラ・マデ」とどう対応するかについて考察する。

・丸尾誠（名古屋大学）：動補フレーズ“V 够”の用法について ―「分量」と感情の接点 ―

結果補語“够”を用いて動作・行為がある基準や程度に達することに加えて、一定の基準を超過した結果、「もう～したくない」という倦怠感を表すこともできる。例えば“吃够了”であれば「十分食べた」という満足義と「食べ飽きた」という倦怠義を有することになる。前者は動作量に言

及したものであり、後者は感情的色彩について述べたものである。同一の“V 够”の形を用いて表される正と負の感情が反映された意味はどのようにして区別されるのであろうか。本発表では両義を判別する根拠となり得る要因について、「V の語義特徴」、「“够”の語義指向」、「関連する構文形式」などの観点から分析を試みる。

◆関西・四国支部例会

◇第 1 回：2024 年 12 月 21 日（土）午後 1 時半～　会場: 関西国際大学尼崎キャンパス（JR 尼崎駅より徒歩約 5 分）オンライン（Zoom）でも実施。

・李暁倩（奈良女子大学・院）：“心里”の意味考察

本発表は二重主語文（「S＋身体名詞＋V」構文）に用いられる“心里”について考察する。従来の研究において、“心里”は場所・空間として認識され、語り手の世界から第三者・客観的という他者視点に立って描写する際に必要なものとみなされる。本研究は、身体性によってもたらされた「内外関係」（“我嘴上这么说，心里却满腹惆怅。”）に基づく「内側」と「外側」には対比的な視点が生じる使い方があり、これは中国語の一般的な言語特徴（対になって対照する言い方が多いこと）を反映していることおよび、メタファー・メトニミーの表現（“心里非常不落体”）は空間性と身体性の両方を反映するものであると主張する。

・鈴木博之（大阪大学）：証拠性の体系化と言語接触：西南中国の例を中心に

本発表では、まず証拠性（evidentiality）の一般言語学的特徴を概観する。証拠性とは「情報源」を示す機能を持ち、「文法化した形態」を持つと広く理解されている。一方で、証拠性は「情報へのアクセス」と「情報源」の２種に分かれるという定義もあることを述べる。次に、チベット系諸言語における証拠性の体系について取り上げる。多くのチベット系諸言語は「情報へのアクセス」と「情報源」を独立に標示し、互いに異なる形態素スロットに現れる。「情報へのアクセス」について、さらに「向自己」や「陳述」を組み込み、さらに認識性標示にも及ぶ。最後に、チベット系と言語接触のある西南官話を中心に、証拠性の現れ及び体系化の度合いについて検討する。

◆九州支部例会

◇第 1 回：2024 年 12 月 14 日（土）午後 1 時～ 会場：福岡大学文系センター棟 14F 学部共通室

・川澄哲也（九州大学）：元代漢児言語の形成に関する一考察―カラホト出土書信が語ること―

太田辰夫が「漢児言語」という概念を提唱して以来、その歴史や性質を巡っては様々な議論が展開されてきた。本発表では元代の漢児言語を考察対象とし、その形成について、内蒙古カラホト遺跡から出土した書信を利用して論じる。カラホト書信には格標識的な“根底”、句末の“有”、命令表現“～識者”等、元刊本『老乞大』と共通する蒙古語的特徴が現れる。距離的に隔たる二地の漢語に同一要素が見出せる事実は、それら要素の来源が、元代に漢地全体で用いられた行政用の翻訳文体「蒙文直訳体」であることを示唆する。ここから元代漢児言語は、蒙文直訳体と接触した当時の民衆がその一部特徴を受容した結果生じた漢語変種であったと推断できる。

・陳頌頌（熊本大学・院）: “因为”の言いさし用法に関して—相互行為分析という視点からみる—

これまで、現代中国語の“因为”が接続詞として、原因・理由を示しながら、主節に従属している従属節をひきだすマーカであると認められ、単に“因为”節のみは文として何らか欠落感があるとされてきた。しかし、話しことばでのコーパス、もしくは日常生活の会話には“因为”節だけで文を終わりとする言いさし文が多くみられる。本発表では、“因为”文に対する分析を通して、その接続機能より「発話内力（illocutionary force）」が目立つという結果が得られた。一方で、“因为”文の出現するコンテクストにも関心をよせ、話し手と聞き手との相互行為により、会話を進めていくことを示唆していることが確認できた。

・宮下尚子（福岡大学）: 元曲元刊本にみえる“也麽（末）哥”について

元曲元刊本には“也麽（末）哥”という語気助詞のような文末詞がみえる。『北曲新譜』によればこれは「叨叨令」という曲の第五句と第六句末で必ず繰り返さなければならない修辞上の決まり字であり、また、『元曲釋詞』によれば襯字であり無意味（第四巻 194 頁）ということである。発表者が調査したところ元曲元刊本において「叨叨令」は 13 回使用され、“也末哥” “也麽哥”のほか“怎末哥”（2 例）がみられた。また、“A 也末 A”“A 也麽 A”という用例も散見されることにより、“也麽（末）哥”は曲辞の決まり字としての役割を果たす一方で、疑問や反語を表す働きがあることを主張する。

・羅子皓（熊本大学・院）: 中国語における「日本人キャラクター言語」の韻律的特徴

中国の映像媒体において外国人キャラクターを表現する際に役割語として声調を崩した普通話がよく使われるが、その崩し方はキャラクターの国籍によって異なる。本研究では典型的な映像媒体に登場する日本人キャラクターの言語使用に着目し、欧米人キャラクターと比較しながら、音声分析ソフト Praat を用いてピッチ可視化をして分析した。その結果、両者とも単音節で四声のシステムを崩すことが確認されたが、日本人キャラクターはフレーズを単位に「昇降型」のピッチパターンを多く使っている一方、欧米人キャラクターは音節内のピッチが平坦で、日本人キャラクターと異なる特徴を示していることが分かった。

会議報告

■ 2024 年度第 2 回理事会

日時：2024 年 11 月 1 日（金）15 時～17 時

会場：関西大学千里山キャンパス岩崎記念館コモンルーム

出席者：佐々木勲人（会長）；松江崇（副会長）；伊藤さとみ、加藤晴子、鈴木慶夏、下地早智子、山崎直樹（以上理事）；吉川雅之（編集委員長）；橋本永貢子（大会運営委員長）；鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）；下地早智子（学界展望編集委員長［兼任］）；金佳、上田裕、今村圭（以上幹事）

欠席者：三宅登之（理事）

■ 2024 年度評議会

日時：2024 年 11 月 2 日（土）10 時 15 分～11 時 45 分

会場：関西外国語大学御殿山キャンパス教室棟 2 階 A203

出席者：構成員 40 名（定数 64 名）

■ 2024 年度総会

日時：2024 年 11 月 2 日（土）17 時 30 分～18 時 15 分

会場：関西外国語大学御殿山キャンパス教室棟 1 階 A104

【報告事項】

1. 一般報告

1.1 役員・委員等の異動

今村幹事より以下の報告があった。

・評議員交代

➢北海道支部：山田敦士先生（日本医療大学）→楊安娜先生（北海学園大学）

1.2 会員動向（10 月 1 日現在）

今村幹事より以下の報告があった。

・会員数：（2023 年 10 月 1 日から 1 年間の増減：住所不明者、年度末退会予定者を含む）

			増減
総会員数（賛助会員をのぞく）		911 名	－8
（内訳）	顧問	10 名	＋2
	名誉会員	10 名	－1
	通常会員	817 名	－16
	団体会員	4 名	±0
	海外会員	70 名	＋7
賛助会員		19 社	±0

・〔昨年度除籍者〕32 名（国内会員 29 名 / 海外会員 3 名）［2023 年 11 月 6 日付］

・〔今年度除籍予定者〕32 名（国内会員 25 名 / 海外会員 7 名）

・ご逝去　2 名（佐藤晴彦名誉会員、是永駿会員）

1.3 支部例会関連

今村幹事より以下の報告があった。

・支部例会世話人交代

➢北海道支部：山田敦士先生（日本医療大学）→章天明先生（小樽商科大学）

・2023 年後半の実績は『中国語学』271 号「彙報」を参照

2. 編集委員会報告

2.1　2024 年度第 2 回理事会

吉川委員長より以下の報告があった。

・『中国語学』第 271 号は 2024 年 10 月 31 日に 1,070 部を発行した。

・今年度の学会奨励賞受賞者は審議の結果、該当者なしとした。

・『中国語学』第 256 号（2009 年）から第 265 号（2018 年）までの 10 号分（10 年分）が J-STAGE で未登載のままとなっている。第一回理事会でその分の電子アーカイブ化が承認されたことを受けて、公告「『中国語学』第 256 号から第 265 号までの電子アーカイブ化に伴う著作権行使の許諾に関する公告（お願い）」が本学会ニューズレターとウェブサイトに掲示された。それについて特に意見は寄せられなかったので、掲載論文と学界展望を電子化することおよび電子版を J-STAGE へ登載することについて、中西印刷から見積りを取り寄せた。その上で、2025 年度会計予算案にアーカイブ化関連経費を計上していただくよう学会事務局にお願いした。要する工期は約 3 ヶ月間であり、作業は中西印刷の繁忙期を避けて進められることになる。

・編集委員会では『中国語学』の活性化、特に投稿論文の増加を図るための取り組みにつ

いて検討を進めてきた。検討は多岐に及んだが、慎重審議の結果、「査読システムの可視化」と「二次審査期間の延長」という 2 つの改革、および「査読システムの可視化」に随伴する「査読基準の精密化」を行うことが望ましいと考え、理事会に答申した。今回の改革では新規に文書「査読指針」を作成する必要があり、かつ既存の文書「投稿規程」「執筆要領」およびその関連文書の改定を伴う。目下、これらの文書について最終調整を行っているところであり、作成・改定された文書を 2025 年度第一回理事会に付議する予定である。

・新旧委員が以下のとおり交代した。

退任：飯田真紀（東京都立大学）、宮本徹（放送大学）、吉川雅之（東京大学）、李佳樑（東京大学）の各委員

再任：伊藤さとみ（お茶の水女子大学）、鋤田智彦（岩手大学）、吉田泰謙（関西外国語大学）、盧建（名古屋大学）の各委員

新任：荒木典子（東京都立大学）、小嶋美由紀（関西大学）、張盛開（静岡大学）、劉驫（大阪大学）の各会員

2.2　2024 年度第 3 回編集委員会

日時：2024 年 11 月 3 日（日）12 時～13 時

新任委員・再任委員による互選により、伊藤さとみ委員を次期委員長に選出した。

（編集委員会）

3. 学界展望編集委員会報告

下地委員長より以下の報告があった。

3.1　2023 年（2024 年度）学界展望の編集

2023 年（2024 年度）「学界展望 語学」は『日本中國學會報』第七十六集に掲載される。今年度は『日本中國學會報』の出版が遅れているが、年内には刊行される予定である。また、2024 年 10 月 31 日発行の『中国語学』第 271 号に転載された。

3.2　委員長および委員の交代について

今次は委員長および委員の交代はなかった。引き続き現体制で 2024 年（2025 年度）学界展望の編集を行う。

3.3　2022 年（2023 年度）「学界展望　語学」の中国語版

中国社会科学院が作成した 2022 年（2023 年度）「学会展望　語学」中国語版を日本中国学会報《学界展望》中国語版翻訳補助チームのメンバーとして季鈞菲会員及び下地が点検した。

4. 大会運営委員会報告

橋本委員長より以下の報告があった。

4.1　全国大会報告

4.1.1　ワークショップ審査結果

5 月 31 日（金）に応募締め切り。応募総数 2 件。審議の結果、下記のとおり採用することを決定した（6 月 8 日持ち回り委員会決定）。

（1）「大規模言語モデル時代の協同型フィードバック教学」（企画者：砂岡和子会員）

（2）「コーパスを用いた数量的研究の可能性について―状態変化表現の研究を例に」（企画者：小嶋美由紀会員）

4.1.2　招待発表について

大会のより一層の充実を目的に、2 日目午後に「招待発表」というセッションを設けることとした。今年度は以下の会員に発表を依頼した。

(1) 大西克也会員：「上古中国語の否定詞体

系：p-系と m-系の逆転」

(2) 木村英樹顧問：「中国語疑問詞の機能論的体系」

「招待発表」の実施方法に関しては、今後とも委員会において検討していく。

4.1.3　研究発表（分科会・ポスター）応募・採択結果

6 月 30 日（日）に応募締め切り。応募総数 86 件。内、有効応募総数 70 件、不受理 16 件（重複応募 15 件、会費未納 1 件）。失格件数 2 件（重大な書式違反）。

審査の結果、口頭発表 45 件、ポスター発表 7 件の計 52 件を採択。不採択数は 16 件。（7 月 27 日持ち回り委員会決定）

採択結果公表後、辞退の申し出が 1 件（9 月 24 日）あった。理由書の提出を求め、委員会で審議の結果、「やむをえない事情」とし、注意とともに採択の取り消しを決定した。（10 月 2 日持ち回り委員会決定）

4.1.4　予稿集について

予稿集原稿は、今年度からフォームを利用しての提出とした。

9 月 30 日の締め切りに間に合わなかったものは 4 編。うち 2 編は翌日大会メールアドレスへ提出された。残り 2 編のうち、1 編は締め切り前に遅延の申し出があったが、残り 1 編は連絡がなく 10 月 1 日に督促した。いずれも 10 月 7 日までに提出があった。

提出された原稿のなかには規定の書式と異なるものがあり、大きな変更を要するものは発表者に修正依頼をし、軽微なものは予稿集作成チーム内で調整した。

予稿集の編成作業には大会運営委員会の委員 6 名が当たり、10 月 25 日に公開した。予稿集は、不分割のファイルと各稿毎のファイルの両方を作成し、また改変・改竄を防止するセキュリティをかけた。不分割のファイルには、発表者一覧および目次から該当ページのリンクを作成した。なおデータ量削減のため、中扉および裏表紙は省略し、ヘッダーも付さなかった。

4.1.5　大会参加申し込みと参加費の支払いについて

昨年同様、イベント管理システム（Peatix）を利用し、事前の参加申し込みおよび参加費の徴収を行った。9 月 28 日（土）に学会ウェブサイトに掲載し、10 月 23 日（水）に事務局から全会員へのリマインドメールにより周知を図った。

4.2　第 75 回大会について（第 1 回理事会にて報告済み）

［日程］2025 年 11 月 8・9 日（土・日）（予定）

［開催校］東北大学川内キャンパス（宮城県仙台市）

［代表者］張佩茹会員

［開催形態］対面

4.3. 委員長・委員の交代

4.3.1 次期委員長の選出（9 月 2 日持ち回り委員会決定）

現任委員による互選により石崎博志委員を次期委員長に選出した。

4.3.2 委員の交代

①開催校代表委員

退任：吉田泰謙委員（関西外国語大。2024 年開催校代表）

就任：張佩茹会員（東北大学。2025 年開催校代表）

②一般委員

退任：浦山あゆみ（大東文化大学）、島村典子

（京都外国語大学）、橋本永貢子（岐阜大学）、福田翔（富山大学）の各委員。

就任：池田晋（佛教大学）、大嶋広美（広島大学）、加納希美（金沢大学）、澤田達也（京都産業大学）の各会員

4.4　プログラム等における発表者の身分表記について（8 月 19 日～24 日持ち回り委員会）

「○○大学・他」という表記について、今年度は、「学」（学部生）「研」（研究員）とすることとした。来年度以降については、不記載を含め引き続き検討していく。

4.5　優秀発表賞について（9 月 2 日～9 日持ち回り委員会）

前回理事会での懇談を受け、優秀発表賞実施に関し、論点整理を行った。

5.「第 6 回中国語学セミナー」について

山崎 WG 座長より以下の報告があった。

第 6 回中国語学セミナーを以下の通り開催した。

（1）開催形態：オンライン（Zoom）開催

（2）開催日：2024 年 9 月 7 日（土）14:00-17:50

（3）講師と題目：

朱春躍「中国語音声：4 つの重要チェックポイント」

井上優「日本語研究者から見た中国語のアスペクトとモダリティ」

（4）参加：無料、最大 137 名がアクセス

（5）事後にアンケートを実施し、参加者 75 名（うち非会員 3 名）から回答を得られた。希望する講義の数は「2 つ」が 8 割以上であり、講義の内容は 9 割以上の参加者が理解できたと評価している。自由記述では講義のわかりやすさ、資料の事前配布、オンライン開催を評価するものが多かった。

6. 研究例会の設置について

・7 月 24 日、支部例会に関する意見交換会を実施した。出席者は支部例会世話人 6 名、会長、副会長、幹事 3 名。

・発表者が確保できないこと、参加者が少ないことなど現状に対するさまざまな問題点が報告された。

・支部ごとに開催している「支部例会」を、地域を限定しない、年 4～5 回程度開催の「研究例会」に改める。

・全国大会や中国語学セミナーとの差別化を図る。

・オンライン方式による開催とするが、対面方式との併用も可とする。

・「支部に関する内規」の変更

現：(2) 各支部には必要に応じて支部例会世話人を置く。

新：(2) 各支部には必要に応じて世話人を置く。

【審議事項】

1. 予算案・決算案

1.1. 2023 年度会計決算案（資料参照）

大西前幹事が欠席のため、上田幹事が報告と説明をおこなった。また、中田前会計監査による監査報告があり、報告の通り承認された。

1.2. 2025 年度会計予算案（同上）

上田幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

2023 年度会計決算書

2024 年 11 月 02 日総会承認

日本中国語学会2023年度会計決算書(案)(2023年4月1日～2024年3月31日)

〈収入の部〉

単位：円

収入	予算	決算
前年度繰越金	9,980,167	9,980,167
積立からの繰入金	3,700,000	3,700,000
通常会員・海外会員会費収入	5,000,000	4,957,652
賛助会員会費収入	600,000	540,000
『中国語学』売上金	400,000	317,014
学界展望補助金	300,000	300,000
中国語学辞典印税		98,034
定額貯金利子		6,788
通常貯金利子		76
計	19,980,167	19,899,731

〈支出の部〉

単位：円

支出	予算	決算
会誌印刷費	2,000,000	1,461,922
大会助成費	300,000	300,000
支部活動助成費	200,000	76,160
中国語学セミナー開催経費	200,000	90,000
通信費	300,000	133,683
事務費	2,000,000	1,783,694
大会事務費	300,000	109,951
学会連合等年会費	30,000	38,000
事務局費	450,000	450,000
編集委員会経費	120,000	120,000
学界展望編集委員会経費	300,000	300,000
ウェブリソース委員会経費	120,000	105,453
ホームページ関連経費	180,000	51,045
大会運営委員会経費	220,000	207,976
選挙関連費	160,000	242,000
旅費交通費	700,000	284,000
会議費等雑費	180,000	104,976
学会奨励賞	100,000	100,000
積立金 [内訳] 記念大会積立金(46万) 事務委託関係積立金(138万) ウェブサイト構築積立金(50万) 国際会議開催支援積立金(50万) コロナ禍基金 (200万)	4,840,000	4,840,000
予備費	7,280,167	9,100,871
計	19,980,167	19,899,731

監査の結果、経理内容は適切であり、経理諸表は的確に処理されているものと認めます。

2024年9月3日

2023年度会計監査　澤田達也

2023年度会計監査　中田聡美

2025 年度会計予算案（2025 年 4 月～2026 年 3 月）　2024 年 11 月 02 日総会承認

2025年度会計予算案（2025年4月～2026年3月）

単位：円

＜収入＞	
前年度繰越金	5,840,167
積立からの繰入金	4,880,000
通常会員・海外会員会費収入	5,000,000
賛助会員会費収入	600,000
『中国語学』売上金	300,000
学界展望補助金	300,000
計	16,920,167

＜支出＞	
会誌印刷費	2,000,000
大会助成費	400,000
支部活動助成費	200,000
中国語学セミナー開催経費	100,000
通信費	300,000
事務費	2,000,000
大会事務費	300,000
学会連合等年会費	30,000
事務局費	450,000
編集委員会経費	120,000
学界展望編集委員会経費	300,000
ウェブリソース委員会経費	120,000
ホームページ関連経費	180,000
大会運営委員会経費	200,000
選挙関連費	300,000
旅費交通費	700,000
会議費等雑費	180,000
学会奨励賞	100,000
『中国語学』アーカイブ化関連経費	550,000
積立金	4,920,000
[内訳]	
記念大会積立金(50万)	
事務委託関係積立金(142万)	
ウェブサイト構築等積立金(50万)	
国際会議開催支援積立金(50万)	
コロナ禍基金（200万）	
予備費	3,470,167
計	16,920,167

2024 年度支部例会および全国大会開催のお知らせ

今年度の例会実施予定

各支部における今後の例会実施予定は次のようになっています。

北海道支部：2025 年 3 月
関東支部：2025 年 1 月
北陸支部：2025 年 3 月
中国支部：2025 年 1 月

発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしています。この要旨は、学会ウェブサイト上の例会案内のページで紹介し、年に 2 回発行の学会ニューズレターにも掲載されます。

なお、開催予定は変更になることもありますので、詳細は各支部例会世話人までお問い合わせ下さい。担当者の連絡先については、学会ウェブサイトをご参照下さい。

（事務局）

第 75 回全国大会開催のお知らせ

日本中国語学会第 75 回全国大会は、2025 年 11 月 8 日・9 日（土・日）に東北大学川内キャンパス（代表：張佩茹会員）で開催されます。ワークショップおよび分科会研究発表・ポスター研究発表の応募期間等の重要事項については、決まり次第、学会ウェブサイトにてお知らせします。

（大会運営委員会）

支部例会から研究例会への移行について

これまで支部ごとに開催していた「支部例会」は、2025 年度より、地域を限定しない「研究例会」に変わります。より多くの方にご参加いただけるようオンライン開催としますが、対面開催とのハイブリッド形式になることもあります。ディスカッションの時間を十分にとった研究発表や、外部の講師をお招きしたワークショップなどさまざまな企画をお届けします。発表募集および開催案内は事務局からメールでお知らせし、学会ウェブサイトにも掲載します。会員の皆様のご参加をお待ちしております。

（事務局）

事務局からのお知らせ

■『中国語学』272 号投稿論文募集

『中国語学』第272号の投稿論文を募集しています。締切は2025年3月10日（月）です。執筆要項、投稿規定、テンプレートなどにつきましては学会サイトをご参照下さい。

https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/journal/contribution.html

■ 退会について

退会は会費納付が前提となっています。退会希望の方は必ず会費納付後の年度内にお申し出下さい。

■ 住所不明の会員

お知り合いの方がおられましたら、ご連絡をお願いします。

荒屋勸、泉興長、張桂珠、丁鋒、八木堅二、山田大輔、楊達、井川壽子、陳瑩、王棋、小西真帆、陳玥、張佳妮、王漫、郭嘉瑋、劉峪伽、曹瑞、林智、黄欣悦、赵云杨、李丹（敬称略）

■ 2024 年度会費納入のお願い

会費未納の方には、11月に振込用紙を同封して納入依頼のご連絡をお送りしました。年会費（一般会員6,000円）を最寄りの郵便局からお振込下さい。速やかにご入金下さいますよう、御協力をお願いします。

郵便振替　加入者名：日本中国語学会

口座番号：00980-6-282216

■ 顧問・名誉会員の推挙

顧問・名誉会員の推挙は、推薦文を添えて2025年9月30日までに学会事務局宛にお願いします。

■ 予稿集の販売

過去の大会予稿集は、第69回以前のものは好文出版にて1,500円でお求めになれます。第70回以降の大会予稿集は電子版のみの発行（非売品）です。詳しくは学会ウェブサイトをご覧下さい。在庫につきましては好文出版（order@kohbun.co.jp）に直接お問い合わせ下さい。

■ 事務局の連絡先（2026 年 3 月まで）

事務局への送付先は以下の通りです：

〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1 - 1 - 1
筑波大学人文社会系内
日本中国語学会事務局宛

また各種のお問い合わせは、学会ウェブサイト（https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/）内の「お問い合わせ」ページをご利用ください。

日本中国語学会会報 2024 年秋季
（年二回発行）
発行者：日本中国語学会事務局
〒305-8571 茨城県つくば市天王台
1-1-1 筑波大学人文社会系内
E-mail: jimukyok_clsj@chilin.jp
URL: https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/
発行日：2024 年 12 月 23 日